

# いじめの根絶

～ いじめの加害児童・生徒に対する

毅然とした指導と親身な支援～

立科町教育相談員 岩上起美男

昨年の10月11日、マンションの14階から、いじめを苦に飛び降り自殺をした滋賀県大津市の2年(当時)男子中学生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

その日の朝、自殺を決意した少年は、どんな思いで自宅のあるマンションの14階に佇んだのでしょうか。いまわの際に、少年は何を見たのでしょうか。

辛くて、悔しくて、切なくて、さぞや苦しかったことでしょう。

一方的に殴られたり蹴られたりした痕は、一人になったとき、なお疼き痛んだのでしょうか。

校舎の3階の廊下で3人に囲まれて、「自殺の練習をしろ。」と言われ、窓を背にして立ち、上半身を外に反り返らせるような姿勢をとられたときは、心の底から恐怖感を覚えたことでしょうか。

一人で悩み苦しんでは、屈辱と怒りに身を打ち震わせていたのでしょうか。

「SOS」のサインを精一杯発したのに、自分の辛さを、悔しさを、切なさを、怒りを本気で受け止めてくれる人が誰もいないと感じ、絶望感や不信任感、孤独感にさいなまれていたのでしょうか。それゆえ、生きるこの意味も希望も見出せなくなり、自ら命を絶つことが唯一無二の解決手段と思ひ詰めたのでしょうか。さらに、執拗ないじめから解放されたいと

いう切迫した思いは、生の喜びや将来への希望、そして、死の恐怖さえ消し去ったのでしょうか。

少年の気持ちを察しますと、胸が締め付けられます。もし少年の切なさに寄り添う大人がいれば、「死」には至らなかったのではないかと考えますと、なお激しく胸が痛みます。

いじめは、児童・生徒誰もがより充実した学校生活を送るために、避けて通ることのできない今日の学校教育の大きな課題であり、圧倒的多数の教師は、大津市の「いじめ自殺」を他人事とは思っていないはずで、自校の実態と重ね合わせながら、少年が発していた「SOS」をきちんと受け止め、全教師が一丸となって、親身に、細やかに、毅然と対応していれば、少年の「死」は防げたかも知れない、と悔やんでいるはずで、いじめはどの学校にも起こり得る問題で、立科小学校も立科中学校も、決して例外ではないのです。

「いじめ自殺」という痛ましい事件を繰り返さないために最も大切なことは、いじめの加害児童・生徒に対する毅然とした指導と親身な支援である、と確信しています。なぜなら、児童・生徒の「心の育ち」は極めて幅広く、「いじめの加

害者」になってしまいうちの子がいる反面、「いじめの加害者」になることを潔しとしない子が大量いるからです。成長期に応じた善悪の判断力や望ましい人間関係構築力、豊かな人権感覚などを身に付けている児童・生徒は、絶対に「いじめの加害者」にはならないのです。やむを得ず傍観的な立場に立たざるを得ないケースがあったとしても、相手を思いやる心が育まれていた児童・生徒は、人を小馬鹿にしたり、嫌がらせをしたり、仲間外しをしたり、暴力をふるったり、あるいは、金銭を強要したりする行為を、絶対に、まさに絶対にしないのです。

したがって、その時その場において、「いじめの加害者」になる子がいなければ、いじめの被害に遭う子はいません。いじめの要因や背景は複雑であっても、いじめの子がいじめ行為をしなければ、いじめは起こらないのです。ですから、「いじめの根絶」のためには、いじめの子に対して、いじめをさせない毅然とした指導と、いじめをしなくても気持ちの安定を保てるような親身な支援が不可欠です。

子どもの気持ちの安定を保つ親身な支援とは、衣食住や安全、無条件の愛情、信頼、承認、集団への所属感などの「人間としての基本的な欲求」を充足することです。そして、努力したときには心か